

諸外国の柔道普及の現状に関する研究

柔道練習生の視点から

平野嘉彦
村松常司
村松成司
藤猪耕大

〈Summary〉

Nihon Denkodokan Judo, established by Jigoro Kano in 1882, has prevailed in six areas—Europe, Asia, Africa, North-America, South-America, and Oceania—because of predecessors' vigorous actions to assure the prevalence of the sport. Now, it is well-established in each country characterized by its own unique culture. We can identify 200 signatories and regions affiliated with the World Judo Federation.

Our study group has been engaged in a series of investigations into the consciousness of Judo, taking its trainees in foreign countries as objects since 2011 to clarify the factors influencing its spread and development. There is similar research regarding the population of Judo enthusiasts in France and Germany. The present study is an investigation of the registered number of individuals in the Judo populations in both countries and their ages, and its findings reveal the efforts and problems associated with the spread of Judo. For this study, our group is reporting on the incentives for trainees to enter Judo, their purposes, the charm of Judo, their goals (i.e., what they want to acquire), their influences, and anticipated personal changes resulting from practicing Judo.

1. 目 的

西暦 1882 年、嘉納治五郎によって創設された日本伝講道館柔道¹⁾は、先人達の心血を注ぐ普及活動によりヨーロッパ、アジア、アフリカ、北アメリカ、南アメリカ、オセアニアの6大陸に発展し、各国独自の柔道文化として定着している。今年、柔道創立 134 年目を迎える世界柔道連盟への加盟国と地域は、200ヶ国を数える。

本研究グループは、柔道の普及・発展に関する諸要因を明らかにするために 2011 年より諸外国の柔道練習生を対象に「柔道の意識調査」を実施して来た。類似研究としては、フランス、ドイツの柔道人口の調査²⁾がある。この研究は、両国の柔道登録人口と年齢等を調査し、柔道普及の取り組みと両国が抱える問題を報告している。今回、本グループは、各国の練習生が柔道と向き合う姿勢や取り組み方に重点を置き、練習生の柔道を始める動機や目的、魅力、柔道練習を通して身に付けたいと思う事柄、練習による影響や自身の変化等について追究したので報告する。

2. 調査方法

- (1) 調査対象：日本（199名）、中国（96名）、ラオス（44名）、ミャンマー（31名）、ベトナム（24名）、アルゼンチン（123名）、フランス（64名）、スイス（70名）の柔道指導者のもとで練習する合計651名を対象とした。
- (2) 調査時期：平成23年3月から平成27年8月の期間、現地にて調査を行った。
- (3) 調査方法：各言語の質問紙を作成し、無記名質問紙法を用いた。各国の調査使用言語は、次の通りである。日本（日本語版）、中国（中国語版）、ラオス（ラオス語版）、ミャンマー（英語版）、ベトナム（英語版）、アルゼンチン（スペイン語版）、フランス（フランス語版）、スイス（フランス語版）
- (4) 調査内容：○年齢、○性別、○練習の頻度、○練習時間、○試合経験、○練習する「きっかけ」、柔道の魅力、練習の目的、得意技の修得に影響のあった人物、練習をするようになってからの自分自身の変化等。
- (5) 分析と比較の方法：国別・性別に整理し、割合を比較した。
- (6) 本研究の仮説

本研究では以下の仮説を検証する。①柔道を始める動機や目的、魅力は国別、性別に差が見られる。②柔道の練習を通して身に付けたいと思う事柄は国別、性別に差が見られる。③練習による影響や自身の変化は国別、性別に差が見られる。

3. 結 果

(1) 調査対象の概要

今回の調査は、諸外国の柔道練習生を対象に柔道に対する意識調査を通して、柔道の普及活動の指針を明らかにする事を目的として、各国の指導者の理解と支援を頂きながら同一のクラブチームに偏らない調査対象となるように配慮した。各国の調査対象を以下に記述する。日本：愛知県柔道研修会の参加者、及び京都学生柔道連盟に所属する京都産業大学、同志社大学、立命館大学、龍谷大学の柔道部員。中国：上海の龍心館道場、上海体育学院の柔道部員。ラオス：ラオス柔道強化選手と地方のクラブチーム。ミャンマー：大学の柔道部員。ベトナム：大学の柔道部員。アルゼンチン：ブエノスアイレス柔道連盟傘下の4つのクラブチーム。フランス：フランス南部のサンテチエンヌで開催された国際柔道研修セミナーの参加者。スイス：ローザンヌの柔道クラブチーム。

表 1-1 国別・性別調査対象

国別 性別	日 本		中 国		ラオス		ミャンマー		ベトナム		アルゼンチン		フランス		スイス		合 計	
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
男 性	131	65.8	47	49.0	26	59.1	16	51.6	16	66.7	99	80.5	45	70.3	59	84.3	439	67.4
女 性	68	34.2	49	51.0	18	40.9	15	48.4	8	33.3	24	19.5	19	29.7	11	15.7	212	32.6
合 計	199	100.0	96	100.0	44	100.0	31	100.0	24	100.0	123	100.0	64	100.0	70	100.0	651	100.0

1) 表 1-1 は、調査した対象者の欠損値を除く 651 名の国別・性別人数の内訳である。

表 1-2 国別・経験年数 (内訳)

国 別	5 年未満		5~10 年未満		10~20 年未満		20~30 年未満		30~40 年未満		40 年以上		合 計	
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
日 本	60	30.2	60	30.2	71	35.6	1	0.5	3	1.5	4	2.0	199	100.0
中 国	77	80.2	16	16.7	3	3.1	0	0.0	0	0.0	0	0.0	96	100.0
ラ オ ス	31	70.5	8	18.2	5	11.3	0	0.0	0	0.0	0	0.0	44	100.0
ミャンマー	13	41.9	12	38.7	5	16.1	1	3.3	0	0.0	0	0.0	31	100.0
ベトナム	2	8.3	12	50.0	10	41.7	0	0.0	0	0.0	0	0.0	24	100.0
アルゼンチン	30	24.3	24	19.5	24	19.5	16	13.0	11	8.9	18	14.6	123	100.0
フ ラ ンス	5	7.8	15	3.4	22	4.4	9	14.1	8	12.5	5	7.8	64	100.0
ス イ ス	6	8.6	26	37.1	26	37.1	6	8.6	4	5.7	2	2.9	70	100.0
合 計			224		173		166		33		26		29	651

2) 表 1-2 は、柔道経験年数をまとめたものである。この表から調査対象の全体の 65.6%以上の者が経験年数が 5 年以上であった。この内、最年少者は 10 歳のフランス人女性で、最高齢者は、経験年数が 65 年の日本人男性であった。また性別と経験年数の関連については、男性の方が女性と比較して柔道の活動歴が長い、このことは社会的な要因が関与していると推定できる。

表 1-3 練習日数 (内訳)

性別	1 日		2 日		3 日		4 日		5 日		6 日		7 日		合 計	
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
男 性	20	64.5	100	80.0	97	81.5	31	81.6	70	56.9	114	56.2	7	58.3	493	100.0
女 性	11	35.5	25	20.0	22	18.5	7	18.4	53	43.1	89	43.8	5	41.7	212	100.0
合 計	31	100.0	125	100.0	119	100.0	38	100.0	123	100.0	203	100.0	12	100.0	651	100.0

3) 表 1-3 は、1 週当たりの練習頻度についてまとめたものである。この表から「6 日」と回答した者が、全体の 651 名中、203 名 (31.2%) と男女共に多く、次いで「2 日」の 125 名 (19.2%) であった。特に週 5 日以上、練習に励んでいる者は全体の 51.9% であった。(文中の (%) の数値は、全体の 651 名の中で、占める割合を示したものである。)

表 1-4 練習時間 (内訳)

1回/時間 性別	1時間以内		1時間		2時間		3時間		4時間		5時間		6時間以上		合計	
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
男性	4	50.0	26	74.3	269	70.2	91	59.9	28	77.8	9	64.3	12	52.2	439	100.0
女性	4	50.0	9	25.7	114	29.8	61	40.1	8	22.2	5	35.7	11	47.8	212	100.0
合計	8	100.0	35	100.0	383	100.0	152	100.0	36	100.0	14	100.0	23	100.0	651	100.0

4) 表 1-4 は、1 日の練習時間について調査した結果である。この表から「2 時間」と回答した者が、全体の 383 名 (58.8%) と最も多く、次いで「3 時間」の 152 名 (23.3%) であった。また、この傾向は男女共に類似しており、全体の 8 割の者が練習時間 (2 時間から 3 時間) 取り組んでいる事が判明した。(文中の数値 (%) は、全体の 651 名の中で、占める割合を示したものである。)

表 1-5 試合経験 (内訳)

大会区分 性別	世界大会		国内代表		府県大会		地域大会		経験なし		合計	
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
男性	30	76.9	106	75.2	237	70.3	26	50.0	40	48.9	439	67.4
女性	9	23.1	35	24.8	100	29.7	26	50.0	42	51.2	212	32.6
合計	39	100.0	141	100.0	337	100.0	52	100.0	82	100.0	651	100.0

5) 表 1-5 は、調査対象者の試合経験についてまとめたものである。この表の内訳から全体の 517 名 (79.4%) の練習生が府・県大会レベル以上の大会に出場経験があることが分かった。また少数ではあるが、全体の 39 名 (6.0%) の者は、各国の代表選手として国際大会への出場経験者である。(文中の数値 (%) は、全体の 651 名の中で、占める割合を示したものである。)

表 2 柔道を始めた動機 (きっかけ)

国別 項目	日本		中国		ラオス		ミャンマー		ベトナム		アルゼンチン		フランス		スイス		度数合計	
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
友人	56	28.1	15	16.7	18	38.4	5	16.1	10	40.0	31	22.3	19	29.7	21	30.0	176	26.2
先生	27	13.6	43	44.9	8	17.0	21	67.7	7	28.0	31	22.3	6	9.4	3	4.2	146	21.8
両親	96	48.3	20	20.8	11	23.4	4	12.9	8	32.0	54	38.9	23	35.9	34	48.5	250	37.3
雑誌	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	0.7	2	3.1	2	2.9	5	0.8
広告	0	0.0	0	0.0	3	6.4	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	1.6	2	2.9	6	0.9
試合観戦	12	6.0	14	14.6	6	12.8	0	0.0	0	0.0	12	8.6	1	1.6	2	2.9	47	7.0
本	0	0.0	1	1.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	7	5.0	1	1.6	0	0.0	9	1.3
テレビ	8	4.0	2	2.0	1	2.1	1	3.2	0	0.0	3	2.2	0	0.0	0	0.0	15	2.2
その他	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	11	17.1	6	8.5	17	2.5
度数合計	199	100.0	96	100.0	47	100.0	31	100.0	25	100.0	139	100.0	64	100.0	70	100.0	671	100.0
調査人数	199		96		44		31		24		123		64		70		651	

6) 表2は、「柔道を始めた動機」について複数回答者も含め、まとめたものである。この表から全体の傾向として「両親の勧め」250名(37.3%)、次いで「友人の勧め」176名(26.2%)、「先生の勧め」146名(21.8%)の順であり、この3つの動機要因が572名(85.2%)であった。また国別、性別に見ても同様の傾向が窺える。但し、中国とミャンマーでは「先生の勧め」により柔道を始める「きっかけ」となったと回答し、柔道普及の推進策が両国の「始めた動機」に反映されていると推察できる。今回の研究テーマである「柔道の普及活動」と「柔道を始める動機」は、大変密接な関連が考えられ、諸外国の教育事情や社会的な背景を十分に理解し、柔道の普及発展について考察する必要がある。

表3 柔道の魅力

項目	日本		中国		ラオス		ミャンマー		ベトナム		アルゼンチン		フランス		スイス		度数合計	
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
身体鍛錬	115	22.8	67	20.0	34	15.0	0	0.0	11	24.4	78	16.9	36	11.5	43	12.5	384	17.0
精神修養	99	19.7	54	16.1	28	12.4	2	5.5	5	11.1	76	16.5	36	11.5	40	11.7	340	15.0
自身の健康	25	5.0	40	12.0	30	13.3	6	16.6	6	13.4	59	12.6	49	15.6	56	16.3	271	12.0
護身術の体得	39	7.7	32	9.5	27	12.0	10	28.0	12	26.7	46	10.0	25	8.0	23	6.7	214	9.5
投げる技術の体得	60	11.9	30	8.9	24	10.6	15	41.6	5	11.1	40	8.7	35	11.1	27	7.9	236	10.4
練習後の充実感	32	6.4	34	10.2	16	7.1	0	0.0	1	2.2	77	16.7	20	6.4	40	11.7	220	9.7
友達との友好	43	8.5	12	3.6	26	11.5	3	8.3	3	6.7	44	9.5	27	8.6	28	8.7	186	8.2
東洋的な服装	1	0.2	7	2.1	6	2.7	0	0.0	0	0.0	5	1.1	4	1.2	5	1.4	28	1.2
技の素晴らしさ	39	7.7	30	8.9	15	6.6	0	0.0	1	2.2	36	7.8	43	13.7	45	13.1	209	9.2
互いに真剣に取り組むこと	51	10.1	29	8.7	20	8.8	0	0.0	1	2.2	1	0.2	39	12.4	36	10.5	177	7.8
度数合計	504	100.0	335	100.0	226	100.0	36	100.0	45	100.0	462	100.0	314	100.0	343	100.0	2265	100.0
調査人数	199		96		44		31		24		123		64		70		651	

7) 表3は、「柔道の魅力」と感じる事柄について、複数回答可としてまとめたものである。この調査結果から全体として「身体鍛錬」が384度数(17.0%)、次いで「精神修養」340度数(15.0%)、「自身の健康」271度数(12.0%)の順に多い項目である。国別の比較では、ミャンマーの「投げる技術の体得」(41.6%)、「護身術の体得」(28.0%)の各項目が高い数値を示した。またベトナムにおいても「護身術の体得」(26.7%)と回答した者が多く、他の国と比較して「柔道の魅力」として捉えているという特色が見られる。また性別による男女の比較についても「柔道の魅力」について同様の傾向であった。

表4 柔道の練習の目的

国 別 項 目	日 本	中 国	ラオス	ミャンマー	ベトナム	アルゼンチン	フランス	スイス	度数合計
	N %	N %	N %	N %	N %	N %	N %	N %	N %
身体能力の向上	53 16.2	47 22.8	24 17.9	0 0.0	7 16.7	38 12.3	28 12.7	56 20.7	253 16.4
精神力の強化	71 21.7	28 13.6	23 17.2	1 3.0	4 9.5	38 12.3	35 15.9	42 15.6	242 15.7
心身の健康	27 8.2	25 12.1	17 12.7	6 18.0	12 28.6	66 21.4	44 20.0	50 18.5	247 16.0
護身術の体得	14 4.3	26 12.6	18 13.4	1 3.0	6 14.3	23 7.5	17 7.7	18 6.7	123 8.0
柔道技術の向上	52 15.9	24 11.7	16 11.9	6 18.0	4 9.5	65 21.1	45 20.5	37 13.7	249 16.2
試合で優勝すること	32 9.8	14 6.8	13 9.7	16 48.5	4 9.5	18 5.9	18 8.2	26 9.6	141 9.1
人間的に成長すること	78 23.9	42 20.4	23 17.2	3 9.1	5 11.9	60 19.5	33 15.0	41 15.2	285 18.5
度 数 合 計	327 100.0	206 100.0	134 100.0	33 100.0	42 100.0	308 100.0	220 100.0	270 100.0	1540 100.0
調 査 人 数	199	96	44	31	24	123	64	70	651

8) 表4は、「柔道の練習を通して、最も身につけたいと思うこと」について、国別・項目別に調査対象651名の複数回答(1,540度数)の結果をまとめたものである。この表から全体の傾向として「人間的に成長すること」が285度数(18.5%)で最も多く、次いで「身体能力の向上」の253度数(16.4%)、「柔道技術の向上」249度数(16.2%)の順となっている。国別に見ると各項目に僅少ながらばらつきが認められ、各国の最も多い回答数は以下の通りである。日本:「人間的に成長すること」(23.9%)、中国:「身体能力の向上」(22.8%)、ラオス「身体能力の向上」(17.9%)、ミャンマー:「試合で優勝すること」(48.5%)、ベトナム:「心身の健康」(28.6%)、アルゼンチン:「心身の健康」(21.4%)、フランス:「柔道技術の向上」(20.5%)、スイス:「身体能力の向上」(20.7%)であった。この調査結果から各国共に複数回答の為に20%台を超える数値の項目が最も高くなった。中でもミャンマーの「試合で優勝すること」(48.5%)とベトナムの「心身の健康」(28.6%)の数値が高く、国の一つの特徴として捉えることができる。また性別による全体の比較では、女性の方が「心身の健康」(12.4ポイント)、「人間的に成長すること」(5.6ポイント)と男性に比べ、2つの項目に高いポイント(%)数値を示した。

表5 技の体得に影響力のあった人物

項目	日本		中国		ラオス		ミャンマー		ベトナム		アルゼンチン		フランス		スイス		度数合計	
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
友人の教え	2	1.0	0	0.0	2	3.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	4	0.5
先生・コーチの教え	7	3.5	6	5.7	7	10.4	1	2.9	2	6.5	5	3.4	4	3.7	7	5.6	39	4.8
自分自身の創意工夫	159	79.1	81	76.4	42	62.7	31	91.2	23	74.2	82	55.8	63	57.8	64	51.2	545	66.5
他の人の技を見て	15	7.5	4	3.8	1	1.3	0	0.0	3	9.6	29	19.7	17	15.6	16	12.8	85	10.3
テレビやVTRを観て	12	6.0	7	6.6	4	6.0	0	0.0	2	6.5	22	15.0	19	17.4	29	23.2	95	11.6
その他	6	3.0	8	7.5	11	16.4	2	5.9	1	3.2	9	6.1	6	5.5	9	7.2	52	6.3
度数合計	201	100.0	106	100.0	67	100.0	34	100.0	31	100.0	147	100.0	109	100.0	125	100.0	820	100.0
調査人数	199		96		44		31		24		123		64		70		651	

9) 表5は、「あなたがよく掛ける技は、どのような人物の影響力があったと思いますか?」の質問に対する調査結果(複数回答可)である。この表から全体の傾向として「自分自身の創意工夫」と回答した者が545度数(66.5%)と最も多かった。また国別に見ても数値の高低はあるものの「自分自身の創意工夫」による者の回答数が多かった。このような技の修得の仕方は、柔道競技の特性上、複雑な技術獲得の在り方が大きな要因と推測する事ができる。

表6-1 柔道を始めてからの自分自身の変化の有・無

項目	日本		中国		ラオス		ミャンマー		ベトナム		アルゼンチン		フランス		スイス		合計	
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
有り	158	79.4	76	79.2	44	100.0	31	100.0	24	100.0	117	95.1	58	90.6	68	97.1	576	88.5
無し	41	20.6	20	20.8	0	0.0	0	0.0	0	0.0	6	4.9	6	9.4	2	2.9	75	11.5
調査人数	199	100.0	96	100.0	44	100.0	31	100.0	24	100.0	123	100.0	64	100.0	70	100.0	651	100.0

10) 表6-1は、「柔道を始めてからの自分自身の変化の有無」についてまとめたものである。この表から「自分自身の変化」について「有り」と回答した者は、全体の651名中576名(88.5%)と高い数値を示した。また国別に見るとラオス(100.0%)、ミャンマー(100.0%)、ベトナム(100.0%)、アルゼンチン(95.1%)、フランス(90.6%)、スイス(97.1%)の各国では、9割以上の者が柔道を通して、自分自身が変化したと認識している。しかしながら日本と中国では「自分自身の変化」について「無し」と答えた者が2割を占めた。この結果が如何なる意味を持つものであるか大変興味深い。

日本と中国の練習生が柔道を始めてから自分自身の変化について「変化無し」と回答した一つの要因として、試合で自分自身の成績が思うような記録を達成出来ないことが、自分自身が変化していない「理由付け」となっているのではないかと推察できる。

表6-2 柔道を始めてからの自分自身の変化した事柄

項目	日本		中国		ラオス		ミャンマー		ベトナム		アルゼンチン		フランス		スイス		度数合計	
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
体力の向上	16	9.6	22	42.3	26	30.2	1	3.1	20	76.9	35	16.0	0	0.0	4	4.6	124	16.8
身体能力の向上	6	3.6	3	5.8	2	2.3	1	3.1	0	0.0	6	2.7	9	13.0	22	25.0	49	6.6
精神力の向上	52	31.4	13	25.0	26	30.2	19	59.4	3	11.5	80	36.5	5	7.3	6	6.8	204	27.6
自信の獲得	15	9.0	4	7.7	11	12.8	8	25.0	0	0.0	36	16.4	7	10.2	3	3.4	84	11.4
筋力の向上	13	7.8	1	1.9	3	3.5	0	0.0	0	0.0	1	0.4	11	15.9	10	11.3	39	5.3
技術の向上	19	11.5	2	3.9	6	7.0	2	6.3	2	7.7	10	4.6	7	10.1	16	18.2	64	8.7
忍耐力の向上	10	6.0	5	9.6	5	5.8	0	0.0	0	0.0	21	9.6	1	1.4	0	0.0	42	5.7
集中力の養成	6	3.6	1	1.9	3	3.5	1	3.1	0	0.0	3	5.9	3	4.4	4	4.6	31	4.2
礼儀作法の修得	20	12.1	1	1.9	1	1.2	0	0.0	0	0.0	14	6.4	14	20.3	16	18.2	66	9.0
友達ができた	4	2.4	0	0.0	3	3.5	0	0.0	1	3.9	3	1.4	5	7.3	1	1.1	17	2.3
その他	5	3.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	7	10.1	6	6.8	18	2.4
度数合計	166	100.0	52	100.0	86	100.0	32	100.0	26	100.0	219	100.0	69	100.0	88	100.0	738	100.0
調査人数	199		96		44		31		24		123		64		70		651	

11) 表6-2は、柔道を始めてから自分自身に変化したと思う事柄についてまとめたものである。

この表から全体では、「精神力の向上」が738度数中、204度数(27.6%)と最も高く、次いで「体力の向上」が124度数(16.8%)であった。また国別に見ると日本では「精神力の向上」(31.4%)、中国:「体力の向上」(42.3%)、ラオス:「体力の向上」と「精神力の向上」が同率で(30.2%)、ミャンマー:「精神力の向上」(59.4%)、ベトナム:「体力の向上」(76.9%)、アルゼンチン:「精神力の向上」(36.5%)、フランス:「礼儀作法の修得」(20.3%)、スイス:「身体能力の向上」(25.0%)と各項目が高い比率を占めた。また性別の全体比較では、男女共に同様の傾向であるものの「精神力の向上」において女性の方が9ポイント高い数値を示した。この調査結果から各国独自の傾向が伺えるが、中でも柔道を通して「自分自身に自信を持てるようになった」と回答したミャンマー(25.0%)とアルゼンチン(16.4%)は、人間の精神的支柱を養成する要素として特筆に値すると考える。

4. 考 察

今回、諸外国の柔道の普及・発展に関する諸要因を明らかにする為に、日本、中国、ラオス、ミャンマー、ベトナム、アルゼンチン、フランス、スイスの各国を訪問し、多くの指導者との懇談により得た情報と柔道に熱心に取り組む練習生のアンケート調査結果をまとめた。この度の調

査対象の概要については、表1-1から表1-5に示した通り、柔道の経験年数が5年以上の者が65.6%以上を占め、また練習量は2時間から3時間取り組んでいる練習生が全体の8割であった。従ってアンケートへの回答は誠実かつ信頼性の高いものであると確信している。

さて柔道の普及・発展に大きな要因となる「柔道を始めた動機（きっかけ）」は、各国の全体の傾向として「両親の勧め」（37.3%）、次いで「友人の勧め」（26.2%）、「先生の勧め」（21.8%）と3項目による影響が強いことが判明した。また国別に各項目の比率を比較すると柔道普及の歴史が古い国（日本：1882年柔道誕生、アルゼンチン：1906年柔道普及開始、フランス：1935年柔道普及開始、スイス：1937年柔道普及開始）は、「両親」や「友人」の影響が強く、柔道普及歴史が浅い国（中国：1979年柔道普及開始、ミャンマー：1997年柔道普及開始、ラオス：1997年柔道普及開始^{3,4)}）では、「先生の誘い」の影響が大きいことが伺える。この傾向は、柔道普及の1つの特色として捉えることができる。特にフランスは、世界の中でも柔道登録人口が80万人と多く、近年では公立小学校の必修科目として取り扱われるまでに、柔道教育の普及が推進されている。このフランスにおける柔道普及の大きな要因は、第一に子供達の長期の休暇中の受け皿として、各種スポーツクラブは激しくクラブ員獲得の勧誘を展開する。中でも柔道クラブは、お稽古事や躰の場として教育的効果が高いと評価されていること。今一つは、1956年に柔道指導者の国家資格を導入³⁾して、指導者への信頼性を保証していることがフランス国民に柔道が支持されている所以と考えられる。しかしながらフランスの登録人口は、平成26年の資料によると未就学児と初等教育（6歳から11歳）を含めて全体の登録者数の58.9%を占めると報告されている²⁾。この事象はフランス柔道界の大きな課題となっている。

各練習生が自分自身の活動を通して感じる「柔道の魅力」は、各自の気持ちの表現であり、大変興味のある調査項目であったが、複数回答可とした為に回答が平均化したことが否めない。全体の2,265度数の回答の中で「身体の鍛錬」（17.0%）、次いで「精神修養」（15.0%）の順であった。また国別では、「投げる技術の体得」ミャンマー（41.6%）や「護身術の体得」と回答したミャンマー（28.0%）、とベトナム（26.7%）は、共に20%台を超える回答項目として挙げる事ができる。特に、練習生が感じる「柔道の魅力」に関しては、各国の柔道理念や指導方法が強く影響していると推察できる。

日々の練習する目的に対する質問では、複数回答（1,540度数）の内、各国を含む全体で「人間的に成長すること」（18.5%）が最も高い数値であった。中でもミャンマーの「試合で優勝すること」（48.5%）の目的意識は高い比率を示した。

柔道の技の体得に影響力のあった人物の調査結果は、各国を含む全体で「自分自身の創意工夫」（66.5%）と最も高い回答率であり、各国を見ても同様の傾向を示した。この特徴は、柔道の複雑な技修得の仕方が大きな要因と推考することができる。

柔道を始めてからの自分自身の変化の有無については、調査対象651名中、576名（88.5%）の者が「変化有り」と答えている。また変化した具体的な事柄として、各国を含む全体の回答として「精神力の向上」（27.6%）が最も高い比率を占め、次いで「体力の向上」（16.8%）であつ

た。また国別に見ると「礼儀作法の修得」の項目がフランス（20.3%）、スイス（18.2%）と他国に比べて高い比率を示した。この背景としてフランスでは、フランスの騎士道精神と日本の武士道精神を融合した柔道8つの精神（礼儀・勇気・友情・自制・誠実・謙虚・名誉・尊敬）を提唱⁸⁾し、啓蒙活動を展開されている事が、その要因と推察される。

今回、各国の柔道練習生の意識調査により、柔道に励む目的や練習を通してどのような事柄が身に付けられたかについて、国別・性別に明らかにすることができた。諸外国の柔道は、1964年の東京オリンピックの翌年からJICA青年海外協力隊柔道隊員の派遣がなされた。現在に至るまで世界45カ国、延べ人数280名を超えている⁵⁾。また民間による親善交流により多くの柔道経験者が各国の柔道指導支援を行い、現在では独自の普及活動を展開している。

日本の柔道普及の現状は、登録人口が約20万人とされているが、経験者の多くが登録制度に未加入という状況が改善されれば、現登録人口の数倍の数値になると推察できる。

柔道創始者の嘉納治五郎は、柔道の精神として「精力善用、自他共栄」を提唱された。また柔道は「体育・勝負・修心」の三つが相俟って柔道であり、いずれか一つでも欠如すると柔道ではないと説かれている¹⁾。日本では2010年3月27日、全国柔道事故被害者の会が発足され「柔道事故の被害に遭われた方とその家族の支援とその活動を通じて柔道の安全に貢献すること」を目的として結成された⁶⁾。また2012年から中学校教育で武道が必修科目となり、柔道授業への安全配慮が強く求められている。全日本柔道連盟は、2014年4月1日「柔道MINDプロジェクト特別委員会」を発足させ「M (MANNERS) : 礼節, I (INDEPENDENCE) : 自立, N (NOBILITY) : 高潔, D (DIGNITY) : 品格」柔道人にふさわしい人間育成に取り組む活動を展開している。

5. まとめ

今回、8カ国の柔道普及の現状について明らかにする為に、柔道練習生の「意識調査」を実施した結果、以下のような事柄が判明した。まず柔道を始めた動機要因は、調査対象者651名中の(37.3%)の者が「両親の勧め」、次いで友人や先生の誘いと練習生に身近な人物が関与している事が分かった。また柔道の魅力については、各国に多少の違いが認められるものの全体では「身体の鍛錬」(17%)、次いで「精神修養」(15%)であった。また柔道を始めるようになってからの自分自身の変化に対する質問に関しては、全体の651名中、576名(88.5%)の者が変化したと回答し、その変化した内容については、全体として「精神力の向上」(27.6%)が最も多く、「体力の向上」(16.8%)の順であった。また各項目についての男女の比較では、同様の傾向を示したが「柔道を通して最も身に付けたいと思う事柄」については、「心身の健康」の男性(1.7%)に対して女性(14.1%)と女性の健康観の意識が高いことが伺えた。

この度の調査により柔道の人間形成の有効性や各国独自の活動の現況について、その概観を把握する事ができた。今後、日本をはじめ世界柔道の教育普及・発展は、競技力の向上と人間的成長の育みが培われる諸活動が両輪のごとく推進されることが重要であると考察される。

参考文献, 並びに参考資料

- 1) 大滝忠夫：『柔道十講（上・中・下）』不昧堂 1971年9月20日
- 2) 曾我部晋哉：フランス・ドイツにおける柔道人口に対する取り組みと両国が抱える問題 日本武道学会・柔道分科会 2016年3月12日
- 3) 全日本柔道連盟50年誌 財団法人全日本柔道連盟 2000年3月31日
- 4) 相馬英樹：『想い出集』2010年1月7日
- 5) 青年海外協力隊員の柔道隊員〈<https://www.judo.or.jp/p38014>〉(2016/9/10 アクセス)
- 6) 柔道事故被害者の会〈<https://ja.wikipedia.org/wikil>〉(2016/9/10 アクセス)
- 7) 村松常司・服部洋児・村松利之・平野嘉彦：「体育授業における安全な授業の工夫」2015年11月30日
- 8) フランスの柔道人口〈<https://www.judo-ch.jp>〉(2016/8/30 アクセス)
- 9) 藤猪省太・平野嘉彦・大山昭三：『JUDO 入門書』ダイコロ株式会社 2008年3月8日

